

鷹巣あさ作 「あしたになれば」

(効果音)

(雨の音)

林由貴子(モノローグ)(日記を読む)10月25日、雨。今日の雨にとっても感謝している。放課後から降り出した雨。昇降口で雨宿りしているわたしの横に、ユニホーム姿のあの人が飛び込んできた。いつも見つめてるだけの人。慌ててそっぽを向いたけど、なんだかとても身近に感じた。神様、ありがとうございます。どうかあしたも彼に合わせてください。由貴子。

(効果音)

(始業チャイム。教室のガヤ)

小田島亜矢 おはよう、由貴子。どうしたんだ？ 珍しく遅刻して。古文の小沢先生、根に持つよ～。

由貴子 亜矢ちゃん、朝 草々からヤなこと言わないでよ。ちょっとね、昨日考え事してたら…。でも、遅刻なんて不覚だったなあ。

亜矢 どうせまた、後藤君のこと考えてたんでしょ？

由貴子 よく分かるなあ。どうして？

亜矢 あ、ちょっと待って。淳一だ。淳ちゃん(と駆け出しオフに)

亜矢 (戻ってきてオン)ごめんごめん。

由貴子 なんだ。もっといっぱい話してくればいいのに。

亜矢 あ、その言い方！ ただ用事があって来ただけなの。人前でイチャつくのは趣味じゃないよ。第一、部活でも部員とマネージャーで、始終一緒なんだから、いい加減飽きちゃうわ。

由貴子 ぜいたくな悩みだと思うんですけど。彼氏のいない人間にとっては。

亜矢 まあまあ。そのお陰で、同じサッカー部の後藤君の情報も入るんだから、感謝感謝、でしょ？

由貴子 うん、まあね。

亜矢 ねえ、由貴子。いい加減に後藤君に打ち明けちゃったら？

由貴子 ダ、ダメ、そんなの。

亜矢 なんでよ。見てるだけじゃいつまでたっても伝わらないわよ。なんだかんだで、もう1年じゃないの。

由貴子 うん。…タイプじゃないんだ、わたし。打ち明けちゃって避けられるより、遠くから見ているほうがいいもん。

亜矢 そんなもんですかねえ。

由貴子 そんなもんよ。

ナレーション …とまあ、好きな男の子の話に夢中なのは、青春中学2年B組の林由貴子と小田島亜矢。由貴子は、サッカー部の後藤君を心の中で熱烈に好きなのです

が。

- 亜矢 じゃあ悪いけど、由貴子、お願い。
- 由貴子 オーケー、亜矢。サッカーボール 15 個、部室に運んでおけばいいのね？
- 亜矢 マネージャー会議なんて、練習ある日はやめてほしいよ。頼むね。
- 由貴子 オーケー。うんしょっと。結構ボール 15 個って重さあるし。あ！
- 後藤健二 持ってってやるよ、林。危なっかしくて見てられないや。
- 由貴子 ご、後藤君…。
- 健二 小田島マネージャーはどうしたの？
- 由貴子 あ、マネージャー会議室に。
- 健二 そうか。
- 由貴子 あ、あの、わたしの名前なんで知ってたの？
- 健二 え？ そりゃあ知ってるよ。マネージャーは淳一の彼女だろ？ その親友だもんな、いろいろとうわさは聞くさ。おっと部屋だ。はいボール。こけるなよ。
- 由貴子 あ、ありがと。
- 健二 そうだ、林、君、教会に行ってるんだって？
- 由貴子 ええ。
- 健二 クリスマスか…。本当に信じてるの、神様なんてものを？
- 由貴子 え、ええ。わたし…。
- 健二 ふーん、意外と古いんだな。あ、ほら、早く持ってけよ、そのボール。じゃあな、ご苦労さん。
- ナレーション …と、初めてあこがれの後藤君と話せたものの、肝心の信仰の話になると、しどろもどろの由貴子でした。次の日曜日、教会で。
- (音楽) (賛美歌)
- 健二 (由貴子の回想。エコー) 神なんて、本当に信じてるの？
- 由貴子 後藤君…。
- 由貴子(モノローグ) どうしてだろう？ わたし、一瞬、自分がクリスマスであること恥ずかしく感じた。「信じてます」ってはっきり答えられなかった。どうして？
- (効果音) (礼拝後のガヤ)
- 教会員 A さようなら。また来週ね。
- 由貴子 あ、さようなら。
- 教会員 B さようなら林さん。気をつけてね。
- 由貴子 はい。さようなら。
- 竹内真理 林さん、途中まで一緒に帰りましょう。
- 由貴子 あ、竹内さん。
- 真理 どうしたの？ 元気ないわね。
- 由貴子 ねえ竹内さん。今日の礼拝のメッセージ、どう思いました？

真理                    “友人や家族に神様の愛を伝えなさい”って言うのでしょうか？ 神様のことを伝えるのは大切だと思うけど、勇気が要るな。

由貴子                そう思います？

真理                    うん。理屈じゃないものね。でも、その人のこと本当に思ってたら、神様を伝えずにいられないんだろうな。

由貴子(モノローグ) 本当にその人のこと思ってたら…。

真理                    あ、わたし、こっちの道。じゃあまたね。元気出して。さよなら。

由貴子                さよなら。

(効果音)              (街の雑踏)

由貴子                あ！

健二                    やあ、偶然だね。

由貴子                後藤君！ あら、日曜日なのに、部活は？

健二                    ああ、今日は休みなんだ。君はどこに行くんだい？

由貴子                教会の帰りなの。

健二                    教会か。昨日はごめん。ヘンなこと言っちゃって。

由貴子                後藤君。

健二                    ん？

由貴子                あのね、本当に、ほんとに神様なんていないと思ってる？

健二                    ああ。

由貴子                どうして？

健二                    神がいるのなら、なぜ戦争が起きるんだ？ なんで人が苦しみながら死ななくちゃならないんだよ？

由貴子                そ、それは…。

健二                    神なんていないさ。結局人間がつくったものじゃないか。そんなものに人の苦しみなんか分かりはしない。

由貴子                それは違うわ。人間が神様をつくったんじゃない。神様が人間をつくったのよ。

健二                    ふーん。神は人間を、いじめるためにつくったのかい？ 人形みたいに操るために。

由貴子                違うわ！ 何よ、なんにも知らないくせに！

健二                    …。

由貴子                あ、ごめんなさい。わたし…。

健二                    いいや、おれが悪かったんだ。少し言いすぎた。ごめん。じゃあな。

由貴子                あ、後藤君。後藤君！

由貴子(モノローグ)(日記を読む) 10月28日、日曜日。なんてわたしはダメなんだろう。あんなことになっちゃうなんて。「神様は、愛するためにわたしたちをおつくりになった。」一番大切なそのひと言を言えなかったなんて。伝えたい。本当の神様を後藤

君に教えたい。イエス様が十字架にかかって、わたしたちの罪を救ってくださったこと。一人一人の傷を、あんなにも温かくいやして下さること。あしたになれば…。そうだ、あしたこそ、後藤君に何もかも話そう。そして、神様のもとに来てほしい。だって、後藤君が大好きなんだもの。好きだから。大切な人だから…。ああ、どうか神様。あした、わたしに力を与えてください。

ナレーション

そして次の日　　。

(効果音)

(朝。小鳥のさえずり)

由貴子

晴れてていい朝！ さすがにグラウンド、まだ練習してない。あ、淳一君と亜矢ちゃん。おはよう。ねえ、今日…。

亜矢

由貴子！

由貴子

どうしたの？ 青い顔して。

亜矢

…。

由貴子

亜矢ちゃん、淳一君。

田川淳一

ご、後藤が…。

由貴子

後藤君がどうかしたの？ わたし、彼に話したいことがあるの。ね、どこにいる？

淳一

死んじゃったよ。

由貴子

…え？

亜矢

後藤君が死んじゃったのよぉ！

由貴子

なんのこと？ 何言ってるのよ？ 悪い冗談はよして。ね、亜矢。

亜矢

由貴子～！（泣きじゃくる）

由貴子

ウソよ。だってわたし、昨日、後藤君に会ったのよ。ウソよ。だってあんな別れか足して、それっきりなの？ ウソよ。ウソに決まってる！

亜矢

昨日の夕方5時ごろ、後藤君の乗ったバイクが海沿いの県道でトラックに跳ねられたの。完全にバイクの過失。信号を無視して、フラリとバイクが出てきたんだって。急ブレーキも間に合わなかったのよ。即死…だったって。

淳一

あいつ、最近部活休みがちだったんだ。あのころからだ、部活一本だったあいつがバイク乗り回すようになったのは。両親が、長い間いがみ合っていて、この間離婚したんだ。そのあと、今度はかわいがってくれたおばあちゃんが、がんで苦しみながら死んだんだよ。最後に部活に来た時、「おれは独りぼっちだ」ってポツリと言ってた。でも、表面はいつもと変わらず…。あいつは人に迷惑をかけるのが大嫌いだったから。

健二

(回想。エコー)神がいるなら、なぜ人が憎み合うんだ？ なぜ人は苦しみながら死ぬんだよ？

由貴子

後藤君！ そうよ、わたしまだ後藤君に神様伝えちゃいない。ウソよ。彼は生きてる。生きてるわ！

(効果音) (雨の音)

由貴子(モノローグ) 静かな静かな雨の中。今わたしは、一つのお墓の前に立っている。墓標には、わたしがあんなに好きだった人の名が刻まれている。あの日、あの最後に彼と会った時、わたしにあとわずかの勇気があれば、あなたの人生は変わっていたかもしれない。「そのうちに…。あしたになれば、そう、あしたこそ」って思ってた。でもそれじゃダメ。後藤君、あなたには、あなたにはあしたなんてなかったんだもの。ああ！(号泣)

わたしは一通の封筒をお墓の横に埋めた。ゆうべ、一晩中かかってかいた、後藤君への手紙。初めての、そして最後の手紙。

ナレーション (エコー)「すべて、重荷を負って疲れている者は、わたしのもとに来なさい。わたしがあなたを休ませてあげよう。」(マタイの福音書 11 章 28 節)

真理 林さん。

由貴子 あ、竹内さん。

真理 お母さんにここだって聞いて。

由貴子 今ね、後藤君に神様のこと話してきたんです。

真理 そう…。

由貴子 遅すぎましたね。でもそうせずにはいられなかった。愛する人に、神様のことを伝えられないままで終わるなんてイヤ。イエス様が愛してくれてること、後藤君が知らないままで死んだなんて、たまらない。でも結局、意味ないでしょうか？彼は死んじゃったんですから。

真理 うん。厳しいけど、彼には届かなかったわね。でも、林さんのその気持ち、分かるな。そうすること、あなたには必要だったんじゃない？ これからの、あなたの生き方のために。

由貴子(モノローグ) そう、わたしのため。後藤君、あなたとは今日でお別れね。あなたは待っててくれなかった。でも、あなたは教えてくれた、“あしたじゃダメだ”ってこと。忘れないわよ、絶対に…。

ナレーション 由貴子は、自分自身に言い聞かせるように、心の中でそうつぶやいたのでした。

< 完 >